

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域で育むキャリア教育

生徒と教員と地域の 信頼関係が互いを成長させた 全国小規模校サミット

第21回 小国高校(山形・県立)



取材・文／江森真矢子

全国の全日制公立立高校約3400校のうち、3学級以下の高校は約150校(※)。その中の1校、山形県立小国高校は、各学年1学級規模の小さな学校だ。この夏、同校が開催した「第2回全国小規模校サミット」には岩手から熊本までの18校131人の高校生が集って交流し、議論を交わした。

生徒のキラキラした様子をもう一度見たい

地域の人口減少や統廃合の可能性

サミットのテーマは「小規模校同士、誇りを持ち、かかわりあい新たな発見を」(下図)。ホストするのは、小国高校の全校生徒72人。プログラムは、参加校の生徒による取組プレゼンテーションから始まり、東北芸術工科大学コミュニケーションデザイン学科長、岡崎エミ氏による講演を受け、小規模校だからこそできることを話し合うワークショップへと続く。前夜には、郷土料理を囲みながら交流する場も設けられた。

三重県から生徒を引率した飯南高校の土方清裕校長は「物凄く熱いセッションが続き、たった1日で生徒たちが響きあい高めあつて成長しているのがビシビシ伝わってきました。それを支えているのが小国高校の生徒のレベルの高さ。全体のファシリテーションも、20以上あるグループの各ファシリテーターも、3つの分科会のグラフィックレコーダーもすべて小国高校の生徒が見事にやっています。全校生徒が80人を切る学校です。これは本当に凄い」と振り返る。

：先行きの不透明さや、少人数で部活動に制約が出るなど、中山間地域の小規模校には共通する課題がある。小国高校もまた、狭い人間関係、学校の良さよりマイナス面に目が向きがちで自信をもてないといった課題が、保健室利用の多さにも表れていた。

そんな生徒たちが大規模なイベントを成功させるまでには、何があったのか。きっかけは、2年前の岩手県立花泉高校との交流だった。広い世界があることも同じような悩みをもつ高校生がいることも知った生徒は「楽しかった」「またやりたい」「岩手と交換留学をしたらどうか」とそれまで見せなかったような意欲を口にした。「またこの輝きを見たい」と同僚に働きかけ、生徒の後押しをし始めたのが板垣祥和先生と養護教諭の小松千穂先生だ。

生徒がファシリテーターになり企画、運営

訪問するとお金がかかる、であれば来てもらえば良い。どうせならたくさん来てもいい生徒が、小規模校でしか味わえないことに価値を見出せるよう

全校生徒数72人の高校が、全国の小規模校に働きかけて開催した「全国小規模校サミット」は、隣県の高校との交流行事がきっかけで昨年度、第1回が開催されました。生徒が見せた交流への意欲をキャッチして、生徒たち自身が大きなイベントを運営できるようにっていく過程には、教師たちの学びと成長もありました。

第2回全国小規模校サミット概要

【趣旨】 全国の小規模高校の生徒が交流し親睦を深めると共に、各校・地域が抱える課題について意見交換し、将来それぞれの地域で活躍する資質や能力、協働意識を育成する。

【大会主題】 [今ここで起きていることは、将来日本中で起こり得ること、小規模校だからこそできることがきっとある]～仲間と一緒に未来を考えよう～

【主催】 全国高等学校小規模校サミット実行委員会

【共催】 小国高校を支援する会

【後援】 小国町／小国町教育委員会／小国高同窓会／小国高後援会／小国高PTA／山形県教育委員会

【指導協力】 東北芸術工科大学コミュニケーション学科

【参加校】 [岩手]伊保内高校／岩泉高校／住田高校／花泉高校／宮古北高校／[山形]荒砥高校／小国高校／新庄南高校金山校／[宮城]志津川高校／松山高校／[福島]川口高校／新地高校／[新潟]正徳館高校／[三重]飯南高校／[愛媛]三崎高校／[高知]大方高校／[長崎]平戸高校／[熊本]天草高校倉岳校(10県18校)参加者総計168人うち高校生131人

第2回全国小規模校サミットの日程・プログラム

1日目

17:45	18:15	20:15
受付	プレセッション 参加者交流会	

2日目

9:00	9:30	9:50	11:30	13:00	14:10	16:30	17:00
受付	開会式	セッション1 参加校 取り組み紹介	昼食	セッション2 講演	セッション3 生徒交流 ワークショップ	閉会式	

School Data

1948年創立/普通科/生徒数72人(男子37人、女子35人)/進路状況(2019年3月卒業)大学短大6人、専門学校9人、大学校1人、就職13人、公務員2人/文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」指定校

※平成30年度学校基本調査



サミットを終えた小国高校生たち。赤いTシャツを着ているのがコアメンバー、前列一番右が板垣先生、前列一番左が小松先生、中央看板右が岡崎教授、左が小野寺さん

に。「こうしたい」という意志があふれるように。そのためには、大人の押し付けではないこと、楽しいことが大事。だから極力、生徒の力を生かして場をつくらう。この前例のないプランの実現を管理職が強力に後押しした。

その前年、コミュニティスクール化に向けて地域住民と熟議を行うため、教員団がファシリテーションを学んでいたことも影響した。多様な主体が共にビジョンを描く場をつくり、ワークショップの面白さを体験していたのだ。これを生徒が自分たちでつくれるようにし

たい、と起案の通った年度末に岡崎エミ教授を訪ね、助力を乞うたところ、同学科卒業生の小野寺真希さんが研修から本番まで、生徒に伴走してくれることになった。

最初から全生徒に呼びかけるのではなく、興味をもちそうな少人数に呼びかけて1回目のファシリテーション研修を実施してもらい、次はそのメンバーが声を掛けて集まった30人への研修。最後は本番のリハーサルも兼ね、30人がファシリテーターとなって全校生徒でワークショップ。最初に集まった7人がコアメンバーとなり準備を進めた第1回は、19団体からの参加者を迎えて開催された。板垣先生にとって収穫のひとつは、食事の準備や会場の手配など、立場は違っても生徒の成長という目的を共有し、一緒に走りながら考えてくれる地域の人たちとの出会いだ。もうひとつは、教員の成長。学校外の人を頼り巻き込む力、焦らず生徒を追い越さないという伴走力、学校も地域も生徒も本場に凄い！という実感を伴った誇り、まずはやってみようという前向き思考が生まれた。

生徒の実感する 自身の変化、学校の変化

第2回の実施を決めた今年度、新旧コアメンバーが第1回実施以降の変化を振り返った。挙がったのは「やればで

きる」「挑戦って大事」「積極的になった」「コミュカUP」といった自身の成長実感。そして、仲間たちを見ると「ポジティブな人が増えた」「明るくなった」「仲間良くなった」。さらに学校全体では「生徒の主体性が大事にされるようになった」「生徒の提案で決めることが増えた」「生徒利用が激減し、除雪ボランティアなど校外活動への自主的な参加が増えたなど、目に見える変化もある。

第1回のコアメンバーとして活躍した3年生の永井莉菫さんは、生徒と教員の関係が大きく変わったと言う。「私たちの話を聞いてくれて、自分はこう思う、っていうことをお互い対等に話せるようになりました。それは、私たちもただで先生が変わったからだと思います。ワークショップ型の授業が増えたり、先生たちが勉強してて、学校外でもいろんな活動をしていることを聞くと、先生に負けてられないな、って思います」。教員と生徒と地域の間に関係が芽生え、地域の間も変わった。「無くなる学校、みたいに思われてる感じだったのが、最近はがんばってる学校、って思ってもらえる」と永井さん。大人からの信頼は生徒の挑戦を後押しする。行事の成功で自信をつけ、それが地域や教師の支えによるものと感じた生徒たちは今、次のサミットに向けて動き始めている。

第2回開催までの軌跡

2019年 7月	2019年 7月	2019年 6月	2019年 5月	2018年 8月以降	2018年 8月	2018年 7月	2018年 6月	2018年 5月	2018年 3月	2017年 12月
第2回サミット開催	ミーティング、スキルアップのための自主練習 (リハーサル/全体ミーティング/各セッション準備、動画、おもてなしなど)20の小プロジェクトを推進)	ミーティング11回(参加校募集開始 手紙(245校宛)メール(260校宛) 送信/東北芸術工科大学で30人がファシリテーター養成講座受講)	ミーティング6回(荒砥高校からもスタップ参加決定/第2回の目標やテーマ決め/東北芸術工科大学岡崎教授による指導)	高校生ボランティアアワード、 SCHネットワークシンポジウム等で実践発表	第1回サミット開催	ファシリテーション研修③ (全校生徒に対し本番リハーサルを兼ね研修実施)	ファシリテーション研修② (コアメンバーが集めた有志30人に対して)	ファシリテーション研修① (コアメンバー7人がワークショップを体験)	サミット開催決定。 東北芸術工科大学岡崎エミ教授に協力を仰ぐ	岩手県立花泉高校との交流